

---

## D 2

aaroshi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D2

### 【Zコード】

N3428D

### 【作者名】

a a r o s h i

### 【あらすじ】

「日本人は、個人としての能力が劣っている。」 テレビジャックで話し始めた総理大臣。なんやら近い将来日本は攻め入れられるらしい。そうして日本人強化のために行われる日本サバイバル強化大会。優勝賞金30億円と、友人の命を救うため、洋介は挑む。

## 第1話・報（前書き）

だめだめです。がたがたです。

読んでて嫌気がさすかもしれません、そこはぐつとたえて最後まで読みきつてやってください。

よろしくお願いします。

## 第1話・報

洋介は、いつも通り机に伏せつつ授業をやり過じると、長いHRがはじまった。

日直が教卓の前にたち、本日の反省やら先生のお話やら言っている。

やがて、担任教師が前に立ちなにやら話し、起立の号令がかかった。寝起きの洋介は、目と鼻の間をつねって、伸びをして、欠伸を立て上がりがつた。

「あ、ようつづけー。れーい。」

洋介と他の生徒たちは軽く頭を下げてから、ざわざわと教室を後にする。

周りの生徒たちは皆、靴箱に向かつ。

しかし、洋介を待ちわびる2人の親友がいた。

隣のクラスの、浅田亮・倉持慧。

そして、葉山洋介

小学校から同じ学校だった3人は、いつも一緒だった。

だが、中3になつた春。運の悪いことに、洋介のみA組で、亮と慧はB組だった。

最初は不安と嫉妬があつたものの、今ではなんともなく過ごせている。

「おっせーよー俺らじつへに終わってたからー。」

悪い悪いと洋介がなだめる。

「ほりつーさつと行くぞー。」

そうして、仲良く3人で帰り道をワイワイと歩く。

途中、慧が抜ける。分れ道で左と右に別れる。

さらに数分後、洋介の家の前に立つ。亮が手を振っている。洋介も笑顔で振り返す。

家に入ると、誰もいなかつた。

カギも開け放しで…。洋介はあきれる。

「あー。疲れたー。」

洋介はそう言つてベットに横になつた。

…どれくらいいたつただろうか。

本日何度目かわからない伸びをする。そして欠伸。寝ていたようだ。

時計を見る。現在8時59分。

危ない。間に合つた。

7時から見たい番組があるじゃないか…。

洋介はそう思いテレビをつけようとする。が、リモコンが見当たらぬ。

しかたなく本体の電源をつける。

左上の12の数字。12時か。

たしかあの番組は8時だったはず。

そう思い洋介は8時にしてしまった。

が、動かない。

どうしたことかと思っていると、突然部屋のドアが開いた。

「おにいちゃん！」

妹だ。

妹の可憐が入ってきた。

「おいカレン！ノックくらいしろよー。」

洋介は怒る。

だが、可憐はエヘヘと笑いながら洋介のベットに腰掛ける。

「ほら、テレビ。一人で見んのなんか不安だからさー一緒に見ようよー。」

「なんだ?なんかホラー特番か?もつねりそろ夏休みだしな。」

洋介はそつ言つて笑う。

だが、可憐は

「違うよーおにいちゃん知らないの?9時から一斉放送で見なきゃいけないやつがあるんだよー。」

真面目な顔で言つ。顔が近い。

「な、なんだそれ。一斉放送?」

小6の妹に問つ。

「うん。なんかねー政府発信?だつたつけな?そんなの。とにかく見なきゃいけないのー。」

可憐はそつ言つてテレビの前に座る。わざわざ移動してだ。

「へー。」

洋介は信じない。

まあどうせ可憐が勝手なこと言つてるんだろう。

そうしてケータイを開く。未読メール12件。

あわててみてみると、全員宛先が違かった。

しかし、内容は同じ。

「一斉放送のヤツ?見るよね?」

「なんだろね。政府発信だなんて。」

「おーい洋介。起きてるかー?」

など。

そして、

放送が始まった。

しかし、普通のニュース同様、2人のアナウンサーが座っている。

「こんばんは。国民の皆さん。」

視点がずれる。

総理大臣がいた。

「こんばんは。」

可憐はつまらないそつな顔をしている。

「みなさん。」

中川総理が口を開く。

「この番組は20分しかありません。すべての放送局に通じてお送りしています。」

つまり、テレビジャックだ。

「さて、いきなり本題なのですが、何もかも便利になつた今、私たちに足りないものはなんでしょう?」

お金。と可憐が即答する。

「お金。愛。などとおっしゃる方もいるとは思いますが、違います。

」

可憐はげんなりした顔をする。

「今、我々に足りないものは、意識です。そつ防御意識。」

いきなり何を言い出すんだ?洋介はそつ思つ。

「現在、私たちの国、日本は、危険な状況にあります。朝鮮民主主義人民共和国との関係問題、アメリカ、ドイツ、ロシア、中国…。」

可憐はあきてしまつたようだ。欠伸をしている。

「日本が今まで特別視されていた理由は、技術があったからです。日本特有の技術。しかし、それもいまや海外に伝わり、中国に追いつかれています。」

アナウンサーたちもうなずいて聞いている。胸には小富山と書かれたプレート。

「大きな国同士ですし、大規模な、国あげての攻撃はありません。ですが、単体的な潜入。つまり、テロ行為などの、中規模攻撃のことです。」

小富山さんも一生懸命きいているぞ。可憐は眠そうだ。

「日本人は、個人としての能力が低い。海外に攻め入られるのは何十年後かわかりませんが、今後のため、第一回日本サバイバル強化大会。を開きたいと思います。」

バカらしい。だがアナウンサーたちは熱心そうだ。演技ではないようだ。

「詳しい内容は…。」

洋介はみつけたりモコンで電源をきつた。

これに関しては可憐も異論はないようだ。

可憐はおやすみーと言つて部屋を出て行つた。

晩御飯は食べていないが、食欲もたいしてないな。

そうして洋介は眠りについた。

田をたまると、授業が終わっていた。

が、それは昨日からの眠りではなく、学校にきてからの畠眠りだ。  
気づくと6時間田が終了。給食を食べたかさえ忘れている。

昨日のように、HRもチントラ終わり、また慧たちが待っているかな。  
と思い急いで外に出る。

が、まだB組は終わっていないようだ。

そんな洋介がB組の前まで行くと、1人の女子生徒がいた。

相原静。

名前の如く静かなヤツで、同じクラスだといふことをえも忘れてしまつ。

そつ思つているとき、急に静がぶるつと震えた。

だが、震えたのは静だけでもなく洋介もだ。B組の中から怒鳴り声  
が聞こえてきた。

「だからなぜダンボールを壊した！ まったく…気が狂つてる…」

カエルみたいな顔の石川という先生だ。全く今日も元気だなあ。

苦笑いしていると、静の視線を感じた。

静の方を見てみると、同じく苦笑いしている彼女がいた。

まだまだ続きそうな説教の声が聞こえる。

「うしてこのも何なので、声をかけてみよ。」

そう思つて洋介が口を開く前に、静が口を開いた。

「ねえ、葉山くん。」

凛とした声をしていた。

「葉山くん、昨日のアレ。見たよね？」

「アレ。一斉放送のことか。」

「ああ。見た。まあそこまで興味がわからなかつたが。」

「そう。でも私は出たいかな。」

「サバイバル大会? だつかけ? あんなの出てメリットあんのか?」

「う。」

「…。葉山くん、ちやんと見てないでしょ。優勝賞金30億円。」

洋介は声をあげて驚く。

「それだけじゃないよね。地位、名譽。すべて手に入るって。ビックリの企業にも就職できるし、国の後ろ盾がつくんだってさ。」

静は笑つていう。

「でも、いっぱい参加しそうだな。それって。」

洋介は再び問う。

静はげんなりした顔で言つ。

「葉山くん、ほんとに見てたのかな。参加できるのは、8組16人だよ。」

2人ペア参加か。そう思った。案外少ないな。

話していると、いつのまにかB組のドアが開く。まっさきに出てきたのは慧と亮だ。

「わりいわりい。待たせたなー。じゃあ速効帰るぞー。」

そうして、静と別れてダッシュする慧と亮を追いかけたのだった。

つづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3428d/>

---

D 2

2010年10月20日17時33分発行